

広島大学大学院教育学研究科教職高度化プログラムの成果と展望

発表者：福山市立城南中学校

教諭 渡邊 博之

chu-jonan@edu.city.fukuyama.hiroshima.jp

1. はじめに

発表者は教職高度化プログラム（国語文化教育学専修）を平成 24 年 3 月に卒業し、1 年間の非常勤講師を経た後、現在福山市立城南中学校^{*1}に勤務している。本発表では、大学院での学びと 2 年間の教育現場での実践を振り返る中で、研究と実践の繋がりの必要性を再確認するとともに、本プログラムの今後の発展に微力ながら寄与できればと考えている。

2. 現在の状況～教科指導の充実とディベート甲子園への挑戦～

本年度は中学校第 2 学年（全 7 クラス）の 3 クラスを副担任しており、教科指導は中学校第 1 学年および第 2 学年を担当している。部活動指導は女子バスケットボールおよび城南太鼓部を担当、校務分掌は生徒指導部という状況である。

現在は、教科指導の力を更に充実させるべく日々取り組んでいる。勤務校は生活的な基盤が脆弱な家庭の生徒が多いため、生徒指導上の課題を抱えている。そのような生徒でも主体的に授業に参加できるよう、城南中学校の本年度の重点目標のひとつである、「言語活動及び生徒指導の三機能を生かした授業づくり」を意識しながら実践を行っている。

また、7 月に開催された中国・四国地区中学・高校ディベート選手権に城南中学校として初めて参加し、奨励賞を頂くことができた。発表者自身が中学から大学までディベートに関わってきたこと、大学入学時から、国語の授業の中や課外活動で生徒とディベート活動を行いたいと考えていたことが、本年度出会った生徒たちの高い意欲とうまく結びつき、今回の活動の実現に至った。その活動を最終的に、文化祭でのステージ発表において学校に還元することができ、来年度以降の活動に繋ぐことができた。



【文化祭でのディベート発表の様子】

*1 全校生徒数 694 名。福山市で二番目に生徒数の多い学校である。

3. 大学院での学びと現在とのつながり

大学院での学びを振り返った際に、「実践的指導力をつける実習」は教師としての成長に役立ったと言える。附属東雲中学校で行った「アクションリサーチ実習」および安芸高田市立八千代中学校で行った「課題解決実習」は、現在の自身の実践的指導力を大きく支えるものとなっている。初任者といえども4月の2週目からは1日4～5時間の授業をしなければならない状況の中で、授業のイメージを持って年度初めを迎えられたことで精神的に余裕が生まれ、その結果、先に挙げたディベート活動といった $+\alpha$ の活動ができたと考えられる。

また、「課題解決実習」において公立中学校で実習できたことは自身にとって非常に大きな学びとなった。実習を通して、学校現場の現状を知ることができたこと、教科指導だけでなく生徒指導の場面などに積極的に関わることができたことで、自身の中における「指導の幅」を広げることができたと言える。

「理論と実践の統合をはかる共通科目群」にある各演習の中で、ストレートマスターと現職マスターで多くのディスカッションができたこと、また、教科を横断してディスカッションができたことも教師としての成長に役立った。自身の教科だけの視点では見えないことや、ストレートマスターだけでは気づくことができないことをディスカッションの中で見いだすことができた。これらの学びは、現在も職員室での教員同士でのやりとりや校内研修、初任者研修での教科間の交流で非常に役立っている。学校は組織で動いているということを実感を持って理解することができた学びである。



【初任者研究授業での風景】

4. 教職高度化プログラムの充実にあたって

教職高度化プログラムでの2年間は、人生の中で最も勉強が充実した2年間であったと思っている。それは理論だけでなく、実践だけでもない、理論と実践を統合した学びができたことにあると考えられる。独立した教職大学院ではなく、既存の大学院の中にプログラムを置いたことにより実現した、研究者養成のプログラムとの密接な連携が、自身の目指していた実践をより高次のものへと誘ったのではないだろうか。幸い国語文化教育学専修は、教職高度化プログラムと研究者養成プログラムの院生控室が一緒であったため、互いに刺激し合いながら「学び合う」ことができた。是非この形を崩さずにあり続けて欲しい。そのような中で、プログラムの研究成果を学内での発表会だけに留まらず、広く外部へ積極的に発信していくことができれば、より本プログラムの特徴を知ってもらえるのではないだろうか。